

田原本町埋蔵文化財
調査年報
2003年度

13

2004

田原本町教育委員会

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が2003年度（平成15年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・工事立会の略報である。発掘調査については、別途、その概要報告書を作成する予定である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業は原因者に、国庫補助事業は土地所有者に多大なご理解とご協力を賜った。
3. 本文に記された遺構の記号については、SDが溝、SKが土坑または井戸、SRが河川、SBが建物を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数である。
5. 本文で記載された弥生時代の時期は、藤田三郎・豆谷和之2003「奈良県における土器編年」「奈良県の弥生土器集成　本文編」（奈良県立橿原考古学研究所）による。
6. 調査・遺物整理にあたっては、青木勘時、秋山浩三、石野博信、金闇 悅、工楽普通、小池香津江、寺澤 薫、西山和弘、樋口隆康、松田真一、宮本長二郎、森 浩一、和田晴吾諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。
7. 本文の執筆は、Iを奥谷知日朗が、II、IIIの各調査は担当者である豆谷和之、清水琢哉、奥谷が執筆した。また、コラムについては文末に記した。編集は、奥谷と藤田三郎がおこなった。

目 次

I. 2003度の調査概要	1
II. 発掘調査の概要	
(1) 唐古・鍵遺跡 第92次調査	5
(2) 唐古・鍵遺跡 第93次調査	6
Column 1 打製石戈が装着された木製柄	7
Column 2 唐古・鍵遺跡 2例目となる大型建物跡	8
Column 3 大型建物跡の北西隅柱	9
(3) 唐古・鍵遺跡 第94次調査	10
Column 4 唐古・鍵ムラを囲む古墳時代の溝	11
(4) 唐古・鍵遺跡 第95次調査	12
(5) 唐古・鍵遺跡 第96次調査	13
(6) 唐古・鍵遺跡 第97次調査	14
(7) 保津・宮古遺跡 第30次調査	15
(8) 保津・宮古遺跡 第31次調査	16
Column 5 保津・宮古遺跡の弥生前期土器	17
(9) 黒田大塚古墳 第5次調査	18
(10) 黒田大塚古墳 第6次調査	19
(11) 篠鉢山1号墳 第4次調査	20
Column 6 改変された墳丘	21
(12) 羽子田遺跡 第26次調査	22
(13) 羽子田遺跡 第27次調査	23
(14) 日光寺推定地 第4次調査	24
Column 7 日光寺を推定する	25
(15) 阪手仁王前遺跡 第1次調査	26
Column 8 中世寺院を推定する	27
(16) 多大垣池遺跡 第2次調査	28
(17) 寺内町遺跡 第7次調査	29
(18) 寺内町遺跡 第8次調査	30
Column 9 近世の焰烙作り	31
Column 10 19世紀の泥面子	32
III. 試掘調査・工事立会の概要	33
(1) 羽子田遺跡 試掘調査	34
(2) 千代遺跡 試掘調査	34
(3) 黒田遺跡 工事立会	35
(4) 宮古北遺跡 工事立会	36

I. 2003年度の調査概要

本町が実施した2003年度（平成15年度）の発掘調査は、18件である。昨年度が19件であり、横ばい状況である。このうち、個人住宅の建築や下水道工事に伴う調査が多く、調査面積が50m²以下の調査が半数以上を占める。いずれも面積・期間ともに制約された状況での調査である。

さて、本年度18件の内訳は、公共事業に伴うもの5件、民間開発によるもの3件（うち重要遺跡認定に基づく調査1件）、個人住宅の建築に伴うもの7件、範囲（内容）確認調査が3件である。範囲（内容）確認調査は、唐古・鍵遺跡、笹鉢山1号墳、日光寺推定地でそれぞれ実施した。

本年度の成果は、弥生時代から近代まである。以下、時代別に調査成果を概観する。

弥生時代 弥生時代の調査では、継続的に実施している唐古・鍵遺跡と、周辺遺跡の調査成果がある。本年度、唐古・鍵遺跡で実施した調査は6件を数え、このうち、1件は遺跡北西部、5件は南西部の調査である。

まず、遺跡北西部で実施した第93次調査の成果が特筆される。第93次調査では、本遺跡で2例目となる大型建物跡を検出した。大型建物跡は、一昨年度の第84次調査と昨年度の第89次調査でその存在を確認しており、延べ3カ年にわたる調査によって、その全容が判明した。建物は中期中頃に属し、独立棟持柱を持たない総柱式である。東側柱列では建物を構築した後に添えた柱を確認しており、建築構造に重要な例を提示することになった。他にも建物と軸を同じくする溝の存在など、この調査で得られた情報量は多く、派生する問題は多岐にわたる。

遺跡の南西部で行った調査は、いずれも緊急調査であり調査面積が狭いものであったが、集落に伴う遺構を確認している。第92次調査では集落内部を区画する溝を、第96次調査では前期後半の溝を検出した。また、第94次調査では集落西側の後期環濠を検出するとともに古墳時代前期の再掘削溝を確認した。今回検出した溝群は、集落の消長とも関係することから、これまで確認した溝群との対応関係の整理が課題となる。

唐古・鍵遺跡以外の周辺遺跡では、保津・宮古遺跡と黒田大塚古墳の調査成果がある。保津・宮古遺跡では、弥生時代前期前半の土坑を検出し、良好な一括資料を得ている。また、黒田大塚古墳の調査では、古墳築造以前の遺構を検出している。これらは弥生時代後期から庄内式期を中心としており、短期的な集落の存在を追認することとなった。

古墳時代 古墳の調査としては、範囲確認調査として笹鉢山1号墳の調査を実施した。今回は、後円部の規模を把握することを目的として後円部の南と北の2カ所にトレンチを設定した。調査の結果、後円部径は約32mと推定され、6世紀中頃を中心とした遺物が出土した。引き続き、墳丘規模の把握するための調査を継続していく。

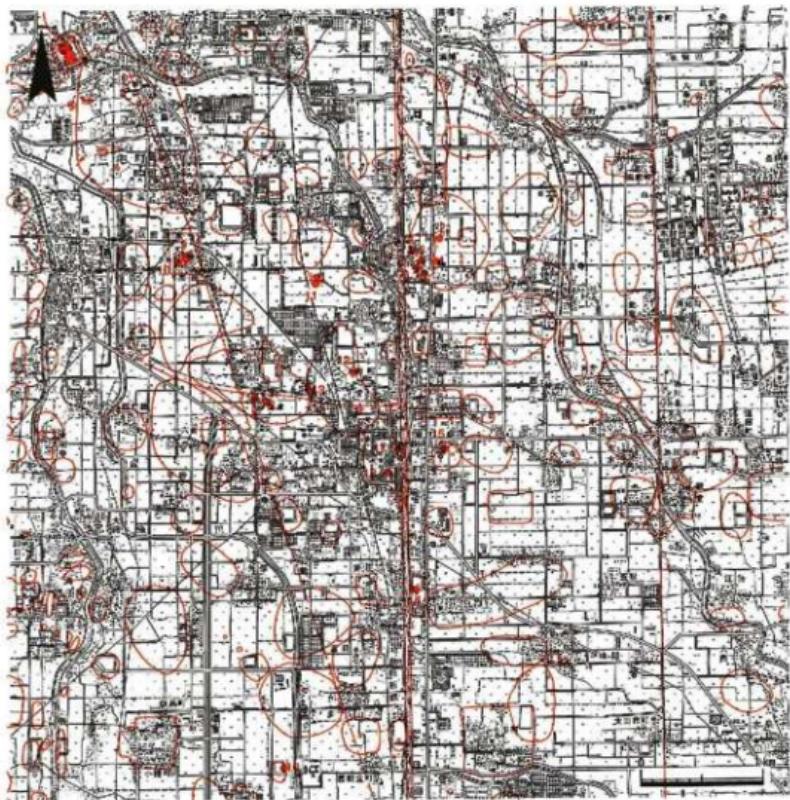
古代～近代 古代の遺跡の調査では、今年度は目立ったものはない。多大垣池遺跡では遺構を確認していないが、平安時代の土器が出土していることから、周辺にこの時代の遺跡が存在する可能性が高い。

中世寺院に関しては、日光寺推定地と坂手仁王前遺跡の調査がある。日光寺推定地では、東西約40mの中世屋敷地の存在が明らかとなった。これにより、河川を挟んだ南側に寺院「日光寺」が、北側に屋敷地が想定できることとなった。

坂手仁王前遺跡の調査は、今回が初めてであるが、多量の瓦が出土した。また、検出した

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届及び通知一覧表

	発掘届 57条の2	発掘通知 57条の3		発掘調査	工事立会	慎重工事	計
2003年度 (平成15年度)	44 (うち変更願3)	13	通知内容	18(うち2002年度通知分2)	25	13	56
			実施分	町21(うち試掘3) 県1(2002年度通知分)	23	-	44



田原本町の遺跡と調査地点

第2表 2003年度 発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1 唐古・鐵	第92次	田原本町鍛255-2	森川真作	掩壁工事	2003.5.13 ～5.16	12m ²	弥生・中世	豆谷和之 奥谷知日朗 (夏更浜跡記)	国庫補助事業
2 唐古・鐵	第93次	田原本町若吉117-1, 115,121-1	田原本町	範囲(内容) 確認	2003.5.19 ～12.11	480m ²	弥生・中世	豆谷 奥谷	国庫補助事業
3 唐古・鐵	第94次	田原本町鍛384-1	金木藤太郎	個人住宅 の建築	2003.7.2 ～7.14	18m ²	弥生・中世 近世	清水琢磨	国庫補助事業
4 唐古・鐵	第95次	田原本町鍛349他 東側道路	田原本町	下水道立 坑の設置	2003.8.4 ～8.11	12m ²	弥生・中世 近世	清水	下水道課
5 唐古・鐵	第96次	田原本町鍛278	山近広城行 事務所組合	防火水槽 の設置	2003.8.19 ～9.9	45m ²	弥生・中世 近世	奥谷	受託事業
6 唐古・鐵	第97次	田原本町鍛283-4他 南側道路	田原本町	下水道立 坑の設置	2003.11.21 ～12.2	17m ²	弥生・中世	奥谷	下水道課
7 保津・宮古	第30次	田原本町保津139-1	栗山キヨエ	個人住宅 の建築	2003.6.7 ～6.12	27m ²	中世・近世	清水	国庫補助事業
8 保津・宮古	第31次	田原本町保津123	岩田好晴	個人住宅 の建築	2004.1.22 ～1.27	11m ²	弥生・中世 近世	清水	国庫補助事業
9 黒田大塚古墳	第5次	田原本町黒田348	田原本町	下水道立 坑の設置	2003.12.8	5m ²	近世	奥谷	下水道課
10 黒田大塚古墳	第6次	田原本町黒田348 西側道路	田原本町	道路の改良	2003.1.15 ～1.27	39m ²	古墳・中世 近世	奥谷	建設課
11 鰐鉢山1号墳	第4次	田原本町八尾253, 264	田原本町	範囲確認	2004.2.4 ～3.12	64m ²	古墳・中世 近世	豆谷 清水	国庫補助事業
12 羽子浦	第26次	田原本町八尾64-10	川井貴幸	個人住宅 の建築	2003.5.6	14m ²	中世	清水	国庫補助事業
13 羽子浦	第27次	田原本町新町199-10	廣瀬信和	個人住宅 の建築	2003.11.12 ～11.14	38.5m ²	中世・近世	奥谷	国庫補助事業
14 日光寺壇定邊	第4次	田原本町千代330-3他	田原本町	範囲確認	2004.1.13 ～1.20	60m ²	中世・近世	豆谷	国庫補助事業
15 板手仁王前	第1次	田原本町板手 697-1, -2	松原社兆 松原作亮	分譲住宅 の建築	2003.6.23 ～7.9	130.5m ²	中世	奥谷	受託事業
16 多大畠池	第2次	田原本町多641, 652	田原本町	水路の改修	2003.11.4 ～12.5	238m ²	中世・近世	清水	農業振興課
17 寺内町	第7次	田原本町463-1	永井弘一	個人住宅 の建築	2003.6.23 ～6.27	20m ²	近世	清水	国庫補助事業
18 寺内町	第8次	田原本町436, 439-2	木下裕夫	個人住宅 の建築	2004.1.6 ～1.15	31m ²	中世・近世 近代	清水	国庫補助事業

主要な遺構は鎌倉時代のものであることから、この時期に寺院の存在が推定できる。今後の調査で、寺院の実体をさらに確かめていく必要がある。

保津・宮古遺跡における2件の調査は、現在の保津環濠集落の内外で実施した調査であったが、いずれも井戸をはじめとした土坑群を検出している。黒田大塚古墳の調査では、中・近世大溝を検出した。大溝の位置関係から、改変されていく古墳墳丘の変遷が明らかとなった。

近世の調査では、寺内町遺跡の2件の調査が挙げられる。第7次調査では、18世紀代の土坑を高い密度で検出した。第8次調査では、未使用的焰烙片や焰烙の外型とみられる土製品が出土しており、付近で製造が行われていたものと考えられる。また、19世紀代の柱穴からは、多量の泥面子が出土した。これらは、近世町屋の様相を把握する上で重要な調査となった。(奥谷)



唐古・鍵遺跡の航空写真と調査位置（平成15年度分）



絵画土器（鹿・鳥・人物）



卜骨



羽状鹿角製品



糸巻？

唐古・鍵遺跡 第93次調査 出土遺物

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第92次調査

所在地 田原本町大字鍵小字上塙255-2

調査原因 摂壁工事

調査期間 2003.5.13~5.16

調査面積 12m²

担当者 豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 1箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約42万m²に達する。

今回の調査地は、遺跡の南西部にある。本地の西側隣接地では、過去に第16次調査を実施しており、弥生時代前・中期の大溝や中世大溝を検出している。

今回は、摂壁工事に伴う事前調査である。遺構密度や遺構面の深度を把握することを目的として、2m²のトレンチを6カ所設定し、調査を実施した。

検出遺構 弥生時代中期前半以前：土坑1基

弥生時代中期前半：溝1条

弥生時代中期中頃：土坑1基、大溝2条

弥生時代後期初頭：大溝1条（再掘削）

弥生時代時期不詳：土坑1基、柱穴1基

中世：井戸1基

弥生時代中期中頃の大溝2条は、北西-南東方向に走行する。このうち1条は後期初頭に再掘削がなされる。同時期の土坑1基は、井戸と考えられる。

出土遺物 弥生土器、石器。

まとめ 今回の調査区は小規模であったが、いずれのトレンチにおいても弥生時代の遺物包含層や遺構を検出したことから、調査地全域に遺構が拡がることを確認した。また、弥生時代中期中頃の大溝を検出しておらず、調査地が集落内の区画溝群域であることが判明した。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレンチ全景 (南東から)



3. 第3トレンチ全景 (西から)

(2) 唐古・鍵遺跡 第93次調査

所在地 田原本町大字唐古小字ソ子田117-1他

調査原因 範囲(内容)確認

調査期間 2003.5.19~12.11

調査面積 480m²

担当者 豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 310箱

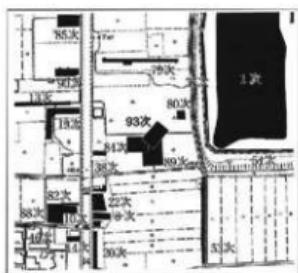
位置・環境 本調査地は、遺跡の北西にあたる。これまでの平成13年度第84次調査、平成14年度第89次調査の2度に及ぶ範囲(内容)確認調査によつて、本地に弥生時代中期の大型建物跡が埋存していることは明らかであった。今回の調査の目的は、その大型建物跡の全容解明にあつた。

検出構 弥生時代前期：土坑3基
弥生時代中期前半：大型建物跡1棟、
土坑2基
弥生時代中期後半：土坑4基、溝1条
弥生時代後期：土坑9基、溝1条
古墳時代初頭：土坑3基、溝1条
中世：大溝1条、
素掘小溝多数

本調査地では、弥生時代前期～中期中頃、
弥生時代中期後半～古墳時代初頭、中世の3
面の造構検出面を確認した。造構密度は高く、
切り合いが激しい。

出土遺物 多量の弥生土器、木器、石器、木製柄付打製
石戈、銅鐸形土製品、銅鏡、被熱発泡土器など。

まとめ 弥生時代中期中頃(大和第Ⅲ-2様式)の
大型建物跡を検出した。大型建物跡は、梁間
2間(6m)×桁行6間(13.2m)の規模を測る。
建物跡は、北東～南西方向に軸をもつ
が、これは第80次調査において大形ヒスイ勾
玉2個を入れた褐鉄鉢容器の出土した区画溝
が本調査区まで延びてきており、それに軸を
あわせていると考えられる。



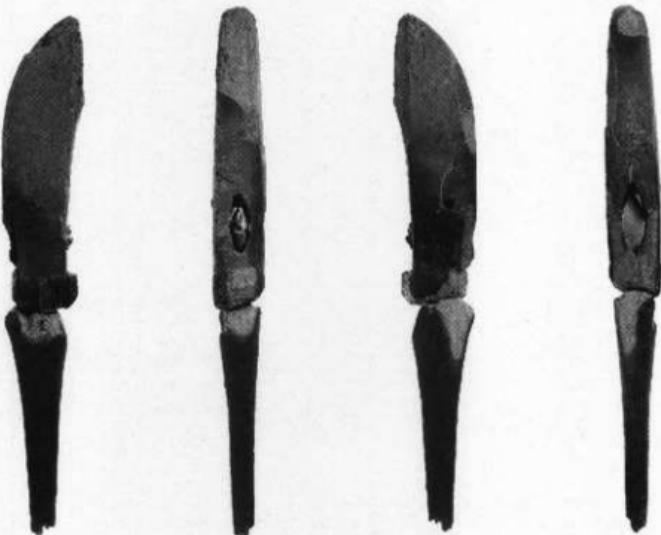
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景(南西から)



3. 大型建物跡北西隅柱検出状況(北から)



打製石戈が装着された木製柄

大型建物跡と同時期と考えられる井戸SK-2120から、打製石戈が装着された状態の木製柄を検出した。SK-2120は、大型建物跡の西側柱列の北端部に隣接し、先行の井戸SK-2121を切る。その規模は、西半部が調査区外にあるが径約4mの不整円形と考えられ、検出面からの深さは約1.0mである。下層には黒褐色粘土の植物層が堆積し、この層から上記木製柄が出土した。

打製石戈が装着された木製柄の現長は34.3cmであるが、握部は炭化欠損し、また、頭部先端は折れのため、本来の長さは不明である。柄の形態は、装着孔の前で段をなしてくびれ、頭部先端は湾曲する。装着孔は梢円形を呈する。打製石戈の装着に際しては、装着孔上端にあたる位置の側面から木製目釘を打ち込んで固定する。

打製石戈は、サスカイト製で、柄の付近で折れて中央部より先端を欠く。形態は、これまで尖頭器あるいは石剣とされてきたものである。柄との装着角度は鋭角の73°である。(豆谷)

Column

1

唐古・鍵遺跡
第93次



唐古・鍵遺跡 2例目となる大型建物跡

第93次調査の大型建物跡は、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺構検出面では、その柱根腐食痕を検出すにとどまる。柱穴掘り方を検出するためには、弥生時代前期から中期中頃の遺構検出面までさらに一面下げる必要があった。

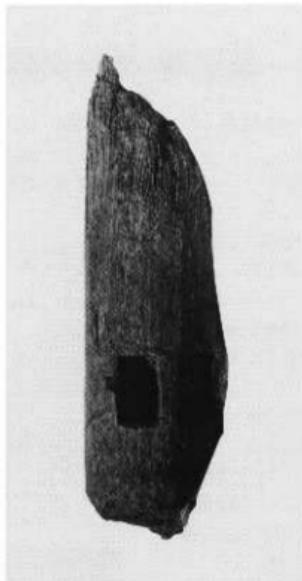
大型建物跡は、検出した合計23基の柱穴と残存する18本の柱根から、平面が長方形で梁間2間（6m）、桁行6間（13.2m）の規模が想定される。独立柱持柱はもたない。側柱のみでなく、身舎中軸線上にも6本の柱列を持つ総柱式である。柱穴は、長軸3m、短軸1mと長大である。柱根は直徑45~83cmで、全てケヤキ材である。北西端の倒されていたPit-1201Wの柱根が最も太く、径83.2cmを測る。

なお、東側柱列には、基本となる7本の柱以外に、3本の間柱がある。この間柱については、柱根の底面レベルや土層の切り合い関係から、後に添えられたものと判断した。柱穴は、径約1mと上述の柱穴に比べると小さい。柱根は半裁材と考えられるが、添え付け位置が浅く腐食が激しい。（豆谷）

Column

2

唐古・鍵遺跡
第93次



目渡穴 1 の要



目渡穴 2 の要

大型建物跡の北西隅柱

今回検出した大型建物跡には、18本の柱根が残存した。このうち、最も柱径の太い北西隅柱（Pit-1201W）を取り上げ、他は現地保存とした。この北西隅柱の上部は、中世素掘溝に切られるとともに腐食する。また、この上端部分は炭化しており、柱上部が火を受けていたことを推測させる。さらには柱の傾倒状況から、建物解体時あるいはそれ以降の土地利用の際に、斜めに倒されたと考えられる。

柱はケヤキ材で、残存長250cm、直径83.2cmを測る。柱下半は残存状況が良く、表面には手斧による「はつり痕」が柱主軸に平行して幾条にも観察できる。手斧の刃部幅は、5.5cmである。柱の底面は柱周囲からの斧による伐採によって逆円錐形を呈する。この下端から約60cm上に、2孔1対の目渡穴が開けられている。目渡穴は、長辺25~40cm、短辺18~25cmの長方形の孔である。1対の目渡穴内には、10本前後の蔓が残存する。柱運搬時に使用したものであろう。（豆谷）

Column

3

唐古・鍵遺跡
第93次

(3) 唐古・鍵遺跡 第94次調査

所在地 田原本町大字鍵小字垣内384-1

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2003.7.2 ~ 7.14

調査面積 18m²

担当者 清水琢哉

遺物量 24箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の西端に位置する。本地の北へ約80mの第29次調査では、弥生時代中・後の環濠を、また、南へ約40mの第62次調査においても、同様の環濠を検出している。このことから、今回の調査地は、環濠推定ラインに位置している。

検出遺構 弥生時代中期 : 環濠 1条
弥生時代後期初頭 : 環濠 1条
弥生時代後期後半 : 環濠 1条 (再掘削)
古墳時代初頭 : 環濠 1条 (再々掘削)
中世 : 建物 1棟、素掘小溝
近世 : 井戸 1基

出土遺物 弥生時代後期初頭の環濠からは、大和第V様式の土器が出土した。また、柵などの木製品や加工途中の木材などが出土した。
後期後半の環濠(再掘削)からは、大和第VI-3様式の土器が出土した。
古墳時代初頭の環濠(再々掘削)からは、庄内式新相の土器が出土した。

まとめ 本調査で検出した環濠SD-101は、集落西側を囲む環濠の1つと推定される。この環濠は弥生時代後期初頭に掘削され(SD-101C)、後期後半(SD-101B)と庄内期(SD-101)の2回にわたって再掘削をおこなっている。ただし、後期初頭の溝白体も、それ以前の環濠を再掘削したものである可能性があるが、調査範囲内では確認できなかつた。

中世の遺構は、唐古南氏居館推定地の関連のものと考えられる。



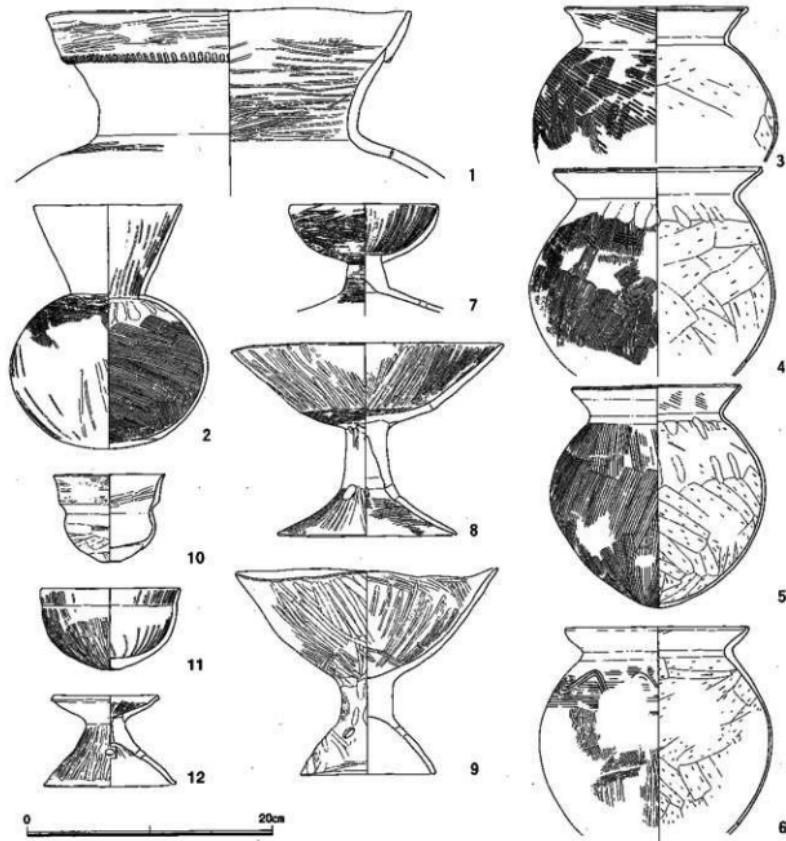
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SD-101遺物出土状況 (西から)



唐古・鍵ムラを囲む古墳時代の溝

第94次調査では、唐古・鍵ムラの西側を囲む弥生時代後期の環濠(SD-101C・B)を検出した。この環濠は、古墳時代前期に再掘削(SD-101)された後、多量の古式土師器を伴って埋没している。

上図は、SD-101の第2～4層から出土した古式土師器である。1は広口壺、2は直口壺、3～6は甌、7～9は高杯、10・11は鉢、12は小型器台である。庄内式新段階の一括資料として評価できよう。ただし、6の甌は胴部の調整が布留式と共通する。また、10の鉢は北陸からの搬入品と推定される。(清水)

Column

4

唐古・鍵遺跡
第94次

(4) 唐古・鍵遺跡 第95次調査

所在地 田原本町大字鍵小字垣内349他東側道路
調査原因 下水道立坑の設置
調査期間 2003.8.4 ~ 8.11

調査面積 12m²
担当者 清水琢哉
遺物量 2箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の西端に位置する。現鍵集落の南北方向の道路上での下水道立坑設置工事に伴う調査である。調査の対象となる立坑は5基で、うち2基が直径2m、3基が直径1.5mの円形である。

検出遺構 弥生時代：土坑1基、溝1条
中世：溝1条
近世：溝1条

出土遺物 弥生土器、土師器、瓦質土器、瓦など。
弥生時代の溝からは、大和第II様式頃の土器が出土した。土坑からは少量の弥生土器片が出土した。弥生時代前期～中期前半頃とみられるが、時期等は明らかでない。

まとめ 北側の調査区では、過去の擁壁工事による擾乱が著しく、遺構はほとんど遺存していなかった。それ以外の調査区でも、近世の南北方向の水路が重複していたため、弥生時代の遺構面はかなり削平を受けた状態であった。

南端の調査区（第5トレンチ）で、弥生時代中期初頭の溝を確認した。この溝は弥生集落の南西端に位置することから、環濠になる可能性がある。

弥生時代の土坑は、地山ブロックの埋土で、木器貯蔵穴の可能性が考えられる。ただし、出土遺物が極めて少ないと遺構の平面形が調査区外に拡がり不明瞭であることから、断定することはできない。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第3トレンチ全景 (北から)



3. 第4トレンチ全景 (北から)

(5) 唐古・鍵遺跡 第96次調査

所在地 田原本町大字鍵小字垣内278

調査原因 防火水槽の設置

調査期間 2003.8.19～9.9

調査面積 45m²

担当者 奥谷知日朗

遺物量 74箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の南西部にあたるとともに、中世居館跡である唐古南氏居館跡推定地と重複する。また、調査地は現八坂神社の境内の北東隅である。このことから、弥生時代から中世までの遺構の検出が予想された。

検出遺構 弥生時代前期：溝1条
弥生時代中期初頭：土坑1基、溝1条
弥生時代中期中頃：土坑1条
弥生時代時期不詳：柱穴1基
中世：土坑3基、溝2条、
大溝1条
近世～現代：土坑1基、大溝1条
弥生時代中期初頭の溝は、北西～南東方向に走行し、幅4m以上、深さ約1.4mを測るものである。

中世大溝は、ほぼ南北方向に走行する。14世紀に掘削されたこの大溝は、繰り返し掘削を行っており、15世紀頃に埋没する。

近世～現代の大溝は、現八坂神社に伴うもので、神社境内を囲む濠と考えられる。

出土遺物 弥生土器、土師器、瓦質土器、瓦など。
まとめ 今回の調査では、弥生時代から現代までの数時期にわたる遺構を検出し、本地における土地変遷を追うことができた。

近世～現代大溝が中世大溝の再掘削溝の可能性もあるが、今回の調査では明らかにできなかった。今後、八坂神社の建立時期を解明していく必要がある。なお、近世～現代大溝から五輪塔水輪部が出土している。現在の境内にも五輪塔が存在することから、八坂神社は明治の廃仏毀釈まで神宮寺であった可能性が高い。



1. 調査地の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (東から)



3. SD-102遺物出土状況 (北から)

(6) 唐古・鍵遺跡 第97次調査

所 在 地 田原本町大字鍵小字垣内283-4 他南側道路

調査面積 17m²

調査原因 下水道立坑の設置

担当者 奥谷知日朗

調査期間 2003.11.21~12.2

遺物量 2箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の南西部にあたる。周辺では、第71・73・74次調査を実施しており、弥生時代前期の土坑や中期の溝、後期の土坑等を検出している。

今回の調査は、下水道の立坑設置に伴うもので、調査対象となる立坑は4基である。

検出遺構 弥生時代中期中頃：大溝1条

中世：大溝1条、小溝2条

調査区が小規模なため、大溝の規模については把握していない。弥生時代中期中頃の大溝は、最も南に位置するトレーニングで検出した。東西方向に走行し、深さは0.8m以上を測る。最も東に位置するトレーニングで検出した中世大溝は、南北方向に走行する。なお、最も西側のトレーニングは、現存の用水路により著しく搅乱を受けている状況であった。

出土遺物 弥生土器、土師器、瓦質土器。

まとめ 今回の調査では、弥生時代や中世の遺物包含層は認められなかった。これらは、周辺の調査においてもほとんどみられない。地山層上面が弥生時代～中世の遺構面であることから、当初の遺構面は削平されているものと考えられる。

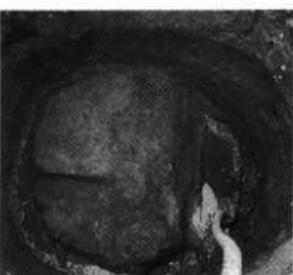
なお、第4トレーニングで検出した中世大溝は第74次調査のSD-57に繋がる可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレーニング全景 (東から)



3. 第4トレーニング全景 (南から)

(7) 保津・宮古遺跡 第30次調査

所在地 田原本町大字保津小字村内垣内139-1

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2003.6.7 ~ 6.12

調査面積 27m²

担当者 清水琢哉

遺物量 6箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。本遺跡は、縄文時代～近世の複合遺跡で、遺跡南部には保津環濠集落がある。

保津環濠集落内の発掘調査はこれまで2回実施し、弥生時代・中世・近世の遺構を検出している。本調査地もこの環濠集落内部にあたる。

検出遺構 中世前半：土坑3基、溝1条、柱穴群

中世後半：井戸1基

近世：井戸1基、土坑1基、柱穴群

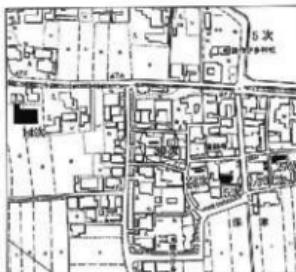
12世紀の土坑は、13世紀の土坑に切られていれば平面形などは明らかでない。13世紀の土坑は、擂鉢状で性格不明。15世紀頃の井戸は、調査区外に拡がるため規模不明。

近世の井戸は18世紀頃とみられ、瓦質井戸枠をもつ。検出面より2m以上掘削したが、安全面から完掘していない。

出土遺物 土師器、瓦器、近世陶磁器

まとめ 調査の結果、本調査地には中世～近世の遺構が濃密に分布していることが明らかになった。13世紀の遺構は、南北方向の溝SD-51以東に集中していたが、それ以降の遺構は調査地全体に拡がるようである。

現在の保津集落内における発掘調査では、室町時代に特定できる遺構は顕著でなかった。しかし、今回の調査成果から、室町期にも保津集落内は屋敷地になっていたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (東から)



3. 中世後半遺構完掘状況 (東から)

(8) 保津・宮古遺跡 第31次調査

所在 地 田原本町大字保津小字村内垣内123

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2004.1.22~1.27

調査面積 11m²

担当者 清水琢哉

遺物量 7箱

位置・環境 今回の調査は、保津環濠集落の東側隣接地で行った。東側隣接地では第27次調査を実施しており、弥生時代中期と中世の遺構を検出している。

検出遺構 弥生時代前期：土坑1基
中世：土坑4基
近世：溝？2条
弥生時代前期の土坑SK-2101は、調査区外に拡がるため全体の規模は明らかでないが、南北約2.3m、深さ0.2mを測る。

12世紀後半の土坑SK-2052は、直径約1m、深さ約0.8mの円形の井戸である。曲物を転用して井戸枠とし、下段が直径30cm、上段が直径40cmのものを用いる。

13世紀前半の土坑SK-2051は平面円形で、直径約0.9m。近世の溝状遺構に上面が削られており、深さ0.4mが残存する。また、13世紀中頃の土坑SK-1051は、1辺1.5mの不整方形で、深さ0.5mを測る。いずれも井戸の可能性がある。

出土遺物 SK-2101より、大和第I-1様式の壺3点が半完形で出土した。

SK-2052下段枠内より、半完形の瓦器塊と白磁小皿が重なった状態で出土した。白磁小皿内面には紅が付着していた。

まとめ 今回の調査では、弥生時代前期前半の遺構を検出した。弥生集落としての保津・宮古遺跡の成立を考える上で重要である。

また、鎌倉時代頃の遺構が現在の保津集落の外にあたる本調査地周辺に集中していることを確認した。



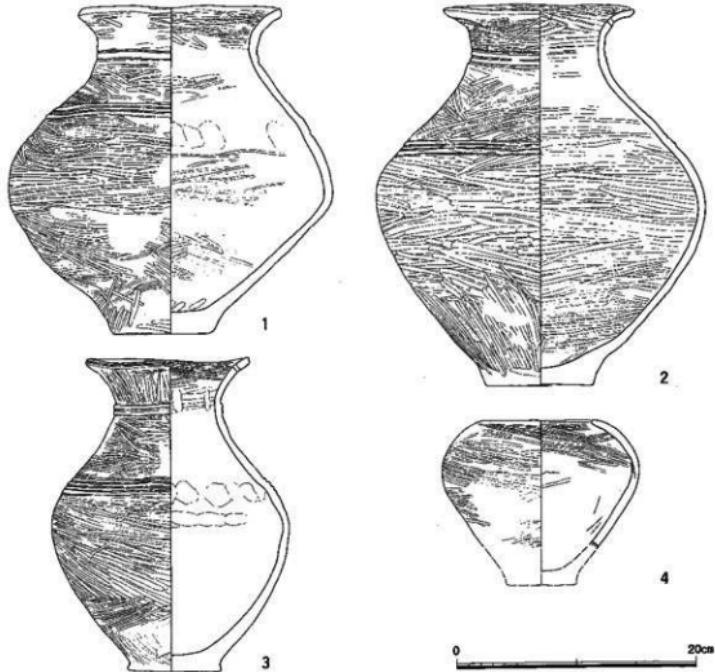
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 第1トレンチ全景 (西から)



3. 第2トレンチ全景 (北から)



保津・宮古遺跡の弥生前期土器

第2トレーナー東半で、弥生時代前期前半の不整円形の土坑（SK-2101）を検出した。この土坑の上部は、近世の造構によって削平されているが、残存した坑底より半完形の土器が出土した。広口壺3点（1～3）がほぼ完形で出土したほか、無類壺（4）や小形壺・壺蓋等の破片が出土している。これらの土器は、形態的に大和第I-1-b様式の特徴をもつものである。

今回の調査により、保津・宮古遺跡が前期前半（大和I-1-b様式）まで遡ることが判明した。盆地中央部において、弥生時代前期前半に遡る集落は、唐古・鍵遺跡に次いで2例目になる。この地域における弥生集落の展開を考える上で重要な成果となった。（清水）

Column

5

保津・宮古遺跡
第31次

(9) 黒田大塚古墳 第5次調査

所 在 地 田原本町大字黒田小字東戸348

調査面積 5 m²

調査原因 下水道立坑の設置

担当者 奥谷知日朗

調査期間 2003.12.8

遺物量 1箱

位置・環境 黒田大塚古墳は、島の山古墳を盟主とする三宅古墳群の南端に位置する、前方部が西を向く前方後円墳である。古墳の東側は古代道路である筋道通りに面し、西側は創建時期が古代と推定される法楽寺がある。また、弥生後期・中近世の集落跡である黒田遺跡の中央に位置する。

これまでの調査により、本古墳は全長86m、墳丘長70mを測り、幅8mの周濠を有していたことが判明した。本来は二段築成の古墳であったが、中近世に大きく改変された結果、現在は1段目が消失した状況である。出土遺物では、土師器、須恵器、円筒・蓋形埴輪、鳥形・蓋形木製品等がある。これらから、古墳の築造時期は6世紀初頭と推定される。

今回の調査地は、後円部の北側にあたる。1次調査の結果から、近世大溝の検出が予想された。

検出遺構 近世～現代：大溝1条

調査区全体が、東西方向に走行する近世～現代溝の堆積土内という状況であった。大溝は、少なくとも2度の再掘削を行っており、昭和50年代に埋没する。

出土遺物 土師器、埴輪、近世陶磁器。

まとめ 今回の調査で検出した溝は、第1次調査で検出した近世大溝IIに対応するものである。この大溝は、溝幅10m以上を測る。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 西壁上層堆積状況 (東から)

(10) 黒田大塚古墳 第6次調査

所在地 田原本町大字黒田小字東戸348西側道路

調査原因 道路の改良

調査期間 2004.1.15~1.27

調査面積 39m²

担当者 奥谷知日朗

遺物量 5箱

位置・環境 今回の調査は、墳丘の西側道路内において行われた排水路の設置に伴うものである。これまでの調査から、現在の墳丘は二段築成の一級目が消失していることが明らかとなっている。今回は古墳の前方部に南北方向の調査区を設定することとなった。

検出遺構

弥生時代後期～	：土坑3基、溝3条、柱穴
古墳時代前期	9基
古墳時代中期	：土坑1基
古墳時代後期？	：溝1条
中世	：大溝1条
近世	：大溝3条、小溝2条

弥生時代後期から古墳時代中期の遺構は、墳丘下にあたる部分で検出した。また、古墳時代後期？の溝は、古墳の中軸線上で検出しておらず、古墳築造に伴って掘削した地割りの溝の可能性がある。しかし、遺物を伴っておらず、時期決定できないことから、遺構の性格付けには慎重さを要する。

出土遺物 弥生土器、土器器、埴輪、瓦器など。

まとめ 今回の調査では、本古墳築造以前の集落に伴う遺構を確認した。この集落は、弥生時代後期から古墳時代前期までの短期的なものと考えられる。

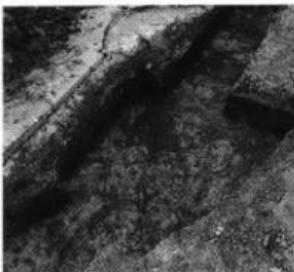
また、墳丘を囲むようにして掘削した中近世の大溝群を検出した。大溝群は、これまでの調査で確認しているものに対応する。中世大溝は、古墳の周濠上を掘削していることから、大溝の掘削する時期まで、墳丘は本来の姿を残していたものと考えられる。墳丘が大きく削平されるのは、中世大溝が埋没した後であろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 近世の大溝 (北から)



3. 弥生時代後期溝完掘状況 (南東から)

(11) 笹鉾山1号墳 第4次調査

所在地 田原本町大字八尾小字山本263, 264

調査原因 範囲確認

調査期間 2004.2.4 ~ 3.12

調査面積 64m²

担当者 豊谷和之・清水琢哉

遺物量 33箱

位置・環境 笹鉾山1号墳は、標高47m前後の沖積地に立地する前方後円墳である。全長48m、高さ4mの墳丘をもち、前方部を東に向ける。現在、墳丘上には稻荷神社が祀られ、前方部先端には住宅1軒が建つ。

本古墳は、これまでの調査により2重周濠をもつことが明らかとなっている。しかし、墳丘本体の規模等についてはほとんど判っていない。田原本町教育委員会では、この古墳の重要性に鑑み、範囲確認を目的とした継続的な発掘調査を計画し、実施している。

今回の調査は後円部の直径を把握することを目的として、後円部南側に第1トレンチ、北側に第2トレンチをそれぞれ設定した。

検出遺構 古墳時代：二重周濠
中世：素掘小溝群
近世～近代：溝1条、道路跡
第1トレンチでは内濠と外濠を検出した。内濠の幅は約7.5m、検出面からの深さは約1.4m。中堤の幅は約8mであった。第2トレンチでは内濠墳丘部分側の肩を確認したほか、近世の溝、道路跡等を検出した。

出土遺物 土師器、須恵器、埴輪、瓦質土器、近世陶磁器、木製品など。

出土した埴輪には、形象埴輪の家形埴輪と円筒埴輪がある。また、須恵器では、器台・大甕・高杯・台付壺等が出土している。このほか、内濠上層から奈良時代の遺物が出土した。

まとめ 調査の結果、後円部の直径は約32mであることが明らかとなった。出土した須恵器は6世紀中頃であるが、周濠中層～上層の出土であり、古墳の築造時期については今後の検討を要する。



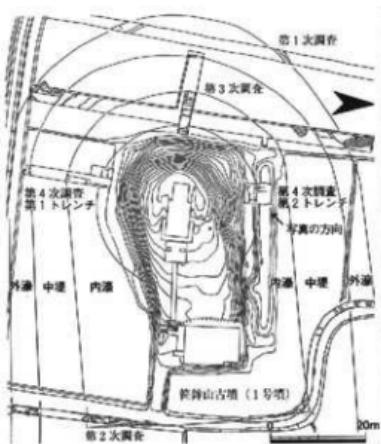
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレンチ全景（南から）



3. 第2トレンチ全景（北西から）



第2トレンチ（北東から）

改变された墳丘

田原本町八尾に所在する篠鉢山1号墳では、これまでに3次の調査が行われている。その結果、前方部を東に向かた墳丘全長約48mの前方後円墳で二重周濠を有し、これを含めた全長は約96mであることが判明している。

今回の第4次調査は、後円部の南側（第1トレンチ）と北側（第2トレンチ）に調査区を設定した。これまで墳丘北側は、墳丘1段の平坦面と墳丘に沿った直線的な窪地が、段築と周濠の痕跡を彷彿させていた。ところが、第2トレンチの調査結果は、周濠痕跡と考えられていた窪地が近世溝であり、墳丘の平坦面が近世初頭に形成された盛土であることを明らかにした。また、古墳築造当初の墳丘1段目は、現盛土から、約12m下位に埋没していた。

現墳丘の北側は、近世初頭に著しい改変を受けており、築造当初の墳形ではない。しかし、近世盛土の下に、良好な状態で墳丘裾が埋没している可能性が高い。（豆谷）

Column

6

篠鉢山1号墳
第4次

(12) 羽子田遺跡 第26次調査

所在 地 田原本町大字八尾小字八反田664-10

調査面積 14m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 2003.5.6

遺物量 1箱

位置・環境 羽子田遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡は、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡、古墳時代前期末～古墳時代後期の古墳群などで構成される複合遺跡である。

今回の調査地は、遺跡東端に位置する。本地を含む南北100mの区画は、宅地造成に伴い、4ヶ所の試掘と工事立会を行った。この結果、南端で弥生時代後期頃の溝を検出したが、北半では顕著な遺構がみられなかった。

今回の調査地は、この中间地点にあたり、遺構が希薄であることが予想された。

検出遺構 中世：素掘小溝3条

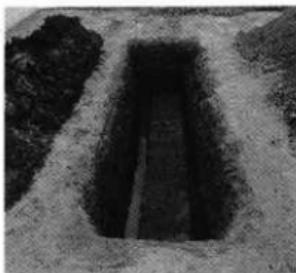
出土遺物 中世遺物包含層より瓦質土器1点のみが出土した。

まとめ 2000年度の試掘調査では、その南端で弥生時代後期の溝を検出したが、今回の調査では、顕著な遺構を検出することができず、本地まで遺構の拡がりはないようである。

羽子田遺跡の弥生時代中期から古墳時代前期の遺構は、田原本小学校敷地を中心に拡がっており、その北限は本調査地の南端までと推定される。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 遺構検出状況 (西から)



3. 遺構完掘状況 (西から)

(13) 羽子田遺跡 第27次調査

所在地 田原本町大字新町小字庚申樹199-10

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2003.11.12～11.14

調査面積 38.5m²

担当者 奥谷知日朗

遺物量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の西端にあたる。西側隣接地では第23次調査を行っており、弥生時代中期前半の溝や中世の河跡を検出している。この弥生時代中期前半の溝からは壺1点が出土しており、方形周溝墓の可能性がある。

検出遺構 中世：河跡1条

近世：大溝1条、小溝8条

調査区北半で検出した中世河跡は、ほぼ東西方向に走行する。幅4m以上、深さは0.5m以上を測る。この河跡からは遺物を確認できなかったが、その走行方向から第23次調査で検出したものに繋がると考えられる。

近世大溝は、北西～南東方向に走行する。再掘削を行っており、溝の最上層は現代客土により埋め立てられている状況であった。近世素掘小溝は、東西方向に軸をもつものと、斜行するものがある。斜行溝は、東西方向の素掘小溝を切って掘削している。

出土遺物 土師器、近世陶磁器、木製品。

まとめ 今回の調査では、弥生時代から古墳時代に所属する遺構は確認できなかった。しかし、近世の地割りに関するとみられる斜行小溝群を検出した。

本調査地の北西では、保津・宮古遺跡第13・26次調査を行っており、条里に沿った素掘小溝群を切る斜行小溝群を確認している。この斜行小溝群は、本遺跡の中央部を西北西～東南東に斜行する奈良時代の古代道路との関連が考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全貌 (北から)



3. 近世大溝半掘状況

(14) 日光寺推定地 第4次調査

所在地 田原本町大字千代小字比沙330-3他
調査原因 範囲確認調査
調査期間 2004.1.13-1.20

調査面積 60m²
担当者 豆谷和之
遺物量 11箱

位置・環境 日光寺推定地は、標高48m前後の沖積地に立地する。これまでに3回の調査を実施し、古墳時代や中世の遺構を検出している。特に、第1次調査で検出した瓦葺き建物の可能性がある中世建物については、付近の「日光寺」という字名から、中世寺院との関連が予想された。

調査は、宅地造成の事前に、遺物包含層および造構面の深さ、造構分布状況を把握するための内容確認の試掘である。敷地の中央を東西に、長さ10m、幅2mの調査区を2カ所設定した。東を第1トレンチ、西を第2トレンチとした。

検出遺構 第1トレンチ

中世：溝2条、柱穴群
近世：素掘小溝10条

第2トレンチ

中世：土坑3基、井戸1基、溝3条
近世：素掘小溝2条

第1トレンチの東端と、第2トレンチの中央で、12世紀後半の瓦器塊が出土する南北溝を検出した。両溝の間隔は、約40mである。この間から、柱穴群や方形井戸を検出した。

出土遺物 第2トレンチの土坑SK-2052から、多量の瓦器塊片（12世紀後半）、土師器小皿片とともに、白磁碗、白磁小皿、青磁小皿が出土した。この他の遺構から出土する瓦器塊は、12世紀代のもので、特に後半のものが主体である。

まとめ 第1トレンチと第2トレンチで検出された南北溝は、中世屋敷を囲むものと考えられる。



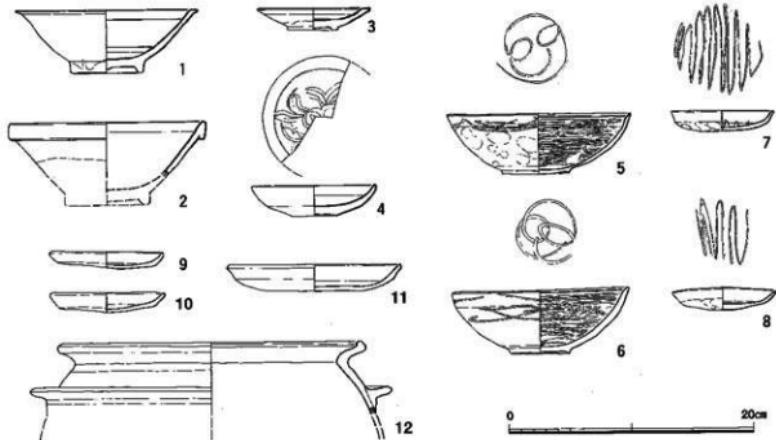
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 第1トレンチ全景 (西から)



3. 第2トレンチ全景 (東から)



日光寺を推定する

今回の第4次調査では、南北方向の柱や柱穴、土坑を検出している。柱穴には根石をもつものがある。本調査地の北約50mで行った第1次調査においても、礎石をもつ柱穴を検出している。第1次調査地から本調査地一帯が、中世屋敷地の一画であったと推定される。

第2トレンチでは、南北溝埋没後に掘りこまれた土坑（SK-2052）から、多量の中世土器片が出土した。土師器小皿片を主体とするが、瓦器塊・小皿、羽釜、輸入陶磁器片なども共伴する。その一部を図示する。

図の1、2は白磁碗、3は白磁小皿。4は青磁小皿で、見込みに花文を施す。5、6は瓦器塊。ともに見込み暗文は連結輪状暗文である。6はやや内湾する体部で、器壁が厚いことから、楠葉型瓦器塊の可能性がある。7、8は瓦器小皿。9、10は土師器小皿、11は土師器中皿。12は羽釜。これらは、12世紀後半に位置付けられる。（豆谷）

Column

7

日光寺推定地
第4次

(15) 阪手仁王前遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字阪手小字シコ田697-1, -2

調査原因 分譲住宅の建築

調査期間 2003.6.23~7.9

調査面積 130.5m²

担当者 奥谷知日朗

遺物量 10箱

位置・環境 阪手仁王前遺跡は、標高約50.5m前後の沖積地に立地する。中世寺院跡と推定されている。本調査地の東側隣接地では、阪手カハウト遺跡として調査を実施している。この調査では、室町時代の土塙墓・木棺墓を検出しておらず、近世ではその上部に塚が形成されたことが判明した。塚は、近世～昭和初期にかけて「クサガミサン」(野神信仰)として信仰されていた。

検出遺構 中世：土坑3基、池状遺構1基、柱穴13基、杭跡14基、素掘小溝群

土坑3基は、いずれも12世紀代の井戸と考えられる。池状遺構(SX-51)は、調査区南端で検出した。北肩のみの検出で、幅は6.6m以上、深さは約0.7mを測る。SX-51からは、12世紀前半を中心とした多量の土師器、瓦器塊、瓦等が出土した。

柱穴は、調査区全域で検出しているが、南半にやや片寄りがみられるようである。これらには、礎石を残すものと、柱の腐食痕跡がみられるものがあることから、礎石建物と掘立柱建物が想定される。

出土遺物 土師器、瓦器、瓦など。

まとめ 今回の調査では、SX-51を中心に多量の瓦が出土した。これは本地が中世寺院の地内もしくは近接地であったことを示している。寺院の廃絶後、本地は耕作地として利用されたものと考えられる。

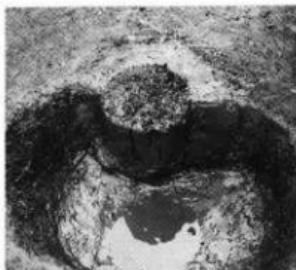
しかし、阪手カハウト遺跡で検出した墳墓は室町時代に所属し、本調査で検出した遺構とは時期差がみられる。寺院の廃絶時期については、今後の検討を要する。



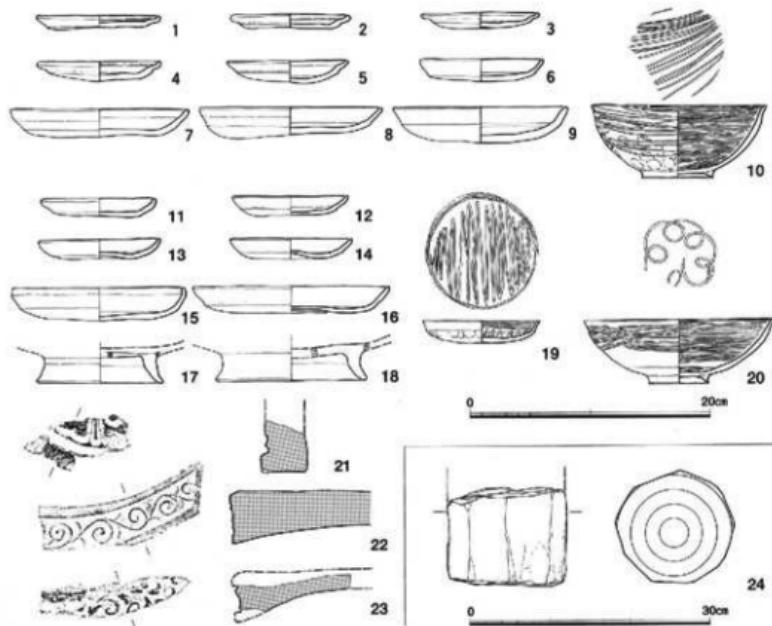
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 中世の柱 (南から)



中世寺院を推定する

阪手仁王前遺跡は、小字「仁王前」を含む周辺地を遺跡範囲とする。中世土器や瓦が採集されることから、中世寺院と推定される遺跡である。今回の調査においても、中世土器や瓦等の遺物が出土した。

1~10はSK-51からの出土である。土師器小皿の口縁は、「て」の字状に仕上げるものが多い。瓦器塊の見込みには平行線状暗文を施す。11~20・22・23はSX-51からの出土である。土器はSK-51よりやや新しい様相を呈する。22・23は唐草文軒平瓦。22は、明日香村橘寺第7次調査出土の軒平瓦に類似するものである。21は、遺物包含層から出土した單弁蓮華文軒丸瓦である。24は柱。横断面が九角形を呈しており、面取りされたものである。長軸14.9cm、残存長12.3cmである。

これらの遺物には時期差が認められるものの、土器はおおむね12世紀代に位置付けられることから、この時期に寺院が存在した可能性がある。(奥谷)

Column

8

阪手仁王前遺跡

第1次

引用文献 (1) 亀田 博1999『橘寺』奈良県文化財調査報告書 第80集(奈良県立橿原考古学研究所)

(16) 多大垣池遺跡 第2次調査

所在地 田原本町大字多小字上タヤ652他西側道路

調査原因 水路の改修

調査期間 2003.11.4 ~ 12.5

調査面積 238m²

担当者 清水琢哉

遺物量 3箱

位置・環境 多大垣池遺跡は、田原本町の南端、標高51m前後の沖積地に立地する。権原市教育委員会が実施した第1次調査では、古墳時代の遺構が検出されている。

今回の調査は、第1次調査の西側に隣接する南北方向の水路の改修に伴い実施した。調査区のうち、東西道路の北側部分を第1トレント（南北22m、東西3m）、道路南側の大垣池東堤防沿いの部分を第2トレント（南北74m、東西3m）とした。

検出遺構 中世：土坑3基、溝1条、
河跡1条、素掘小溝群
近世：素掘小溝群
近世末～近代：土坑1基、溝1条、
河跡1条、素掘小溝群

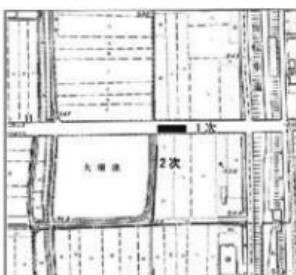
調査では、幅0.3~0.4m、深さ0.3m前後の南北方向の素掘小溝を多数検出した。

第2トレント南側では、南南東～北北西方の近世末頃の河跡を検出した。

出土遺物 遺物の大半は中・近世素掘小溝から出土した。北側の第1トレントからは、平安時代頃の遺物が比較的まとまって出土した。南側の第2トレントからも中・近世の遺物が出土しているが、遺物量は少ない。

まとめ 今回の調査では、中世以降の南北方向の素掘小溝を多数検出した。小溝の深さが0.3m前後で深いことから、第1次調査で検出されている古墳時代の遺構は遺存しない。

なお、平安時代頃の遺物が第1トレントで多くみられた。遺構は検出していないが、付近にこの時代の遺跡が存在する可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 第1トレント全景 (南から)



3. 第2トレント全景 (北から)

(17) 寺内町遺跡 第7次調査

所在地 田原本町小字三輪町463-1

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2003.6.23~6.27

調査面積 20m²

担当者 清水琢哉

遺物量 7箱

位置・環境 寺内町遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。田原本寺内町は、田原本を領した平野氏初代長泰が教行寺を誘致することにより造営が始まった。しかし、2代目長勝の時に教行寺を退去させて事実上平野氏の陣屋町となった。教行寺跡には同じ浄土真宗の浄照寺と平野氏の菩提寺となった浄土宗の本誓寺が入っている。

今回の調査地は、遺跡の東端、寺川西岸に位置する。絵図によると、調査地北側の東西道路は、寺川にかかる橋から真っ直ぐ寺内町の中心である浄照寺の山門へと続く。また、この道の北側には平野氏の陣屋が置かれた。このような立地から、本調査地は門前通りに面した町屋部分に相当するとみられる。

検出遺構 近世後半：土坑12基、溝1条

近世末：土坑3基

現代：土坑2基

出土遺物 検出した遺構は全て近世～現代のものであり、出土遺物も近世が中心である。

まとめ 調査の結果、本調査地は近世の屋敷地であったことが明らかとなった。検出した遺構は18世紀が中心であるが、調査区の大半が18世紀の土坑群で構成されるため、それ以前の遺構の有無についてはわからない。ただし、包含層中の瓦器・瓦質土器は少なく、わずかに黄褐色粘質土のベース層直上にみられた浅い砂質土堆積（SK-09）から瓦器小片が出土した程度である。このことから、調査地が町屋化したのは近世になってからと考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 近世の土坑 (南から)

(18) 寺内町遺跡 第8次調査

所在地 田原本町小字南町436,439-2

調査面積 31m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 2004.1.6~1.15

遺物量 27箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の南東部、楽田寺の南側約50mに位置する。楽田寺の創建年代は明らかでないが、中世の田原本では大きな勢力を誇っていたことが『大乗院寺社雜事記』から推測される。これによると、室町時代の楽田寺は堂宇20カ所を数える大寺院であった。このことから、本調査区でも楽田寺に関わる中世遺構の存在が想定された。

検出遺構 古代末~中世初頭? : 素掘小溝群、柱穴群
中世前半: 溝1条、柱穴群
中世後半: 井戸1基、大溝1条、柱穴群
近世末 : 土坑2基、大溝1条、柱穴群
近代 : 小溝1条、落ち込み、建物2棟

出土遺物 土師器、瓦器、陶磁器、土製品、木製品など。
中世の遺構からは、12~14世紀頃の瓦器・土師器が出土した。また、15世紀前半頃の井戸には曲物を転用した井戸枠が使われていた。
近世末頃の土坑では、未使用の焰塔片^{ヨリタケ}を主とした土師器の多量投棄がみられた。焰塔製作に用いられたとみられる土製外型や焼土塊も多数出土した。付近で焰塔の製造が行われていたとみられる。

礎石抜き取り後の柱穴で、19世紀頃の泥面子^{モリマツ}が190点出土した。類例のない多量出土であり、注目される。

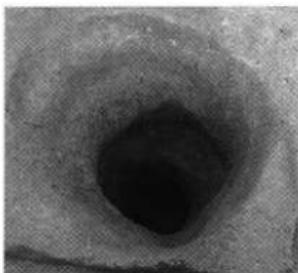
まとめ 調査の結果、本調査地は12世紀中頃に造成されたことが明らかとなった。これは、北側に隣接する楽田寺の建立に伴う可能性が考えられる。室町期には西側に南北方向の大溝、中央に井戸、東側に建物という構成で遺構が分布し、楽田寺に関わる遺構である可能性が高い。しかし、近世の遺構は楽田寺の衰退から町屋に関連する遺構と考えられる。



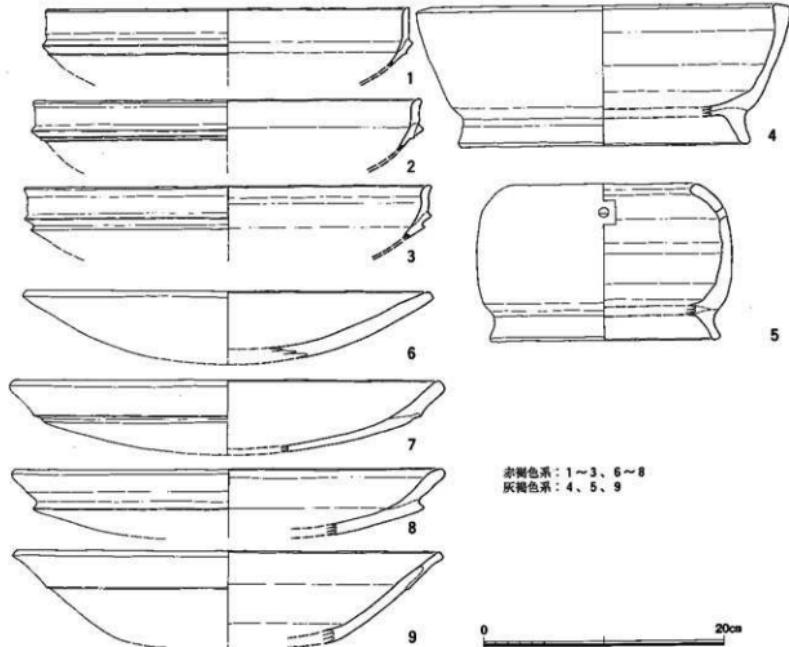
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. SK-51完掘状況 (南から)



ほうらく 近世の焙烙作り

調査区北端で検出したSX-02からは、煤の付着していない未使用の焙烙や火鉢が出土した。また、焙烙を製作するための外型とみられる土製品も出土している。

図1～3は焙烙。口縁が直立するものと、外反するものがあるが、いずれも口縁部の立ち上がりは短い。4・5は土師質の火鉢。

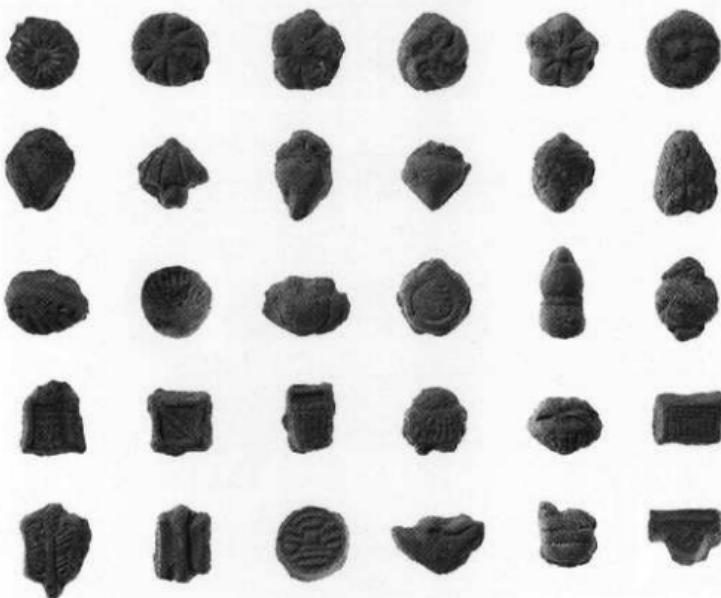
6～9は焙烙の外型とみられる土製品である。内面には、焙烙を製作する際に付着したとみられる粘土を残すものがある。体部外面は無調整、口縁部はヨコナデ。これらは、焙烙と同じように一回り大きな外型から成形したものと考えられる。胎土から、赤褐色を呈するもの（6～8）と、灰褐色で精良なもの（9）とに分けられる。前者は、口縁部の上面に粘土を付加して成形するものが多い。後者は、口縁の外側に粘土を貼り足し口縁部を肥厚させるものである。本品は深みがあり、土鍋など別器種の外型である可能性もある。

焙烙は近世末の特徴をもつことから、この時期に調査地付近で焙烙をはじめとする土器の製作をおこなっていたものと考えられる。（奥谷）

Column

9

寺内町遺跡
第8次



19世紀の泥面子

調査区北側の建物柱穴埋土から、泥面子190点が出土した。花、鶴、鮑、宝珠、小槌、軍配、算盤、瓢箪、手桶、蟹などの27種の意匠がある。最も多かったのが梅花とみられる5弁の花で、60点が出土した。次いで多いのが菊花で、23点が出土した。柱穴埋土から泥面子が多量に出土した例はなく、その意図は明らかでない。

さて、本調査地で焰烙の製造がおこなわれていたことは前述した通りである。京都府木津町市坂では、土塔や花餅土型なども焰烙と同時に製造していたことがわかっている。今回出土した泥面子と焰烙とは、出土した遺構に切り合い関係があるものの、両者の製作には何らかの関係があるかもしれない。(清水)

Column

10

引用文献 (1) 難波洋三1989「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』(京都大学理学文化財研究センター)

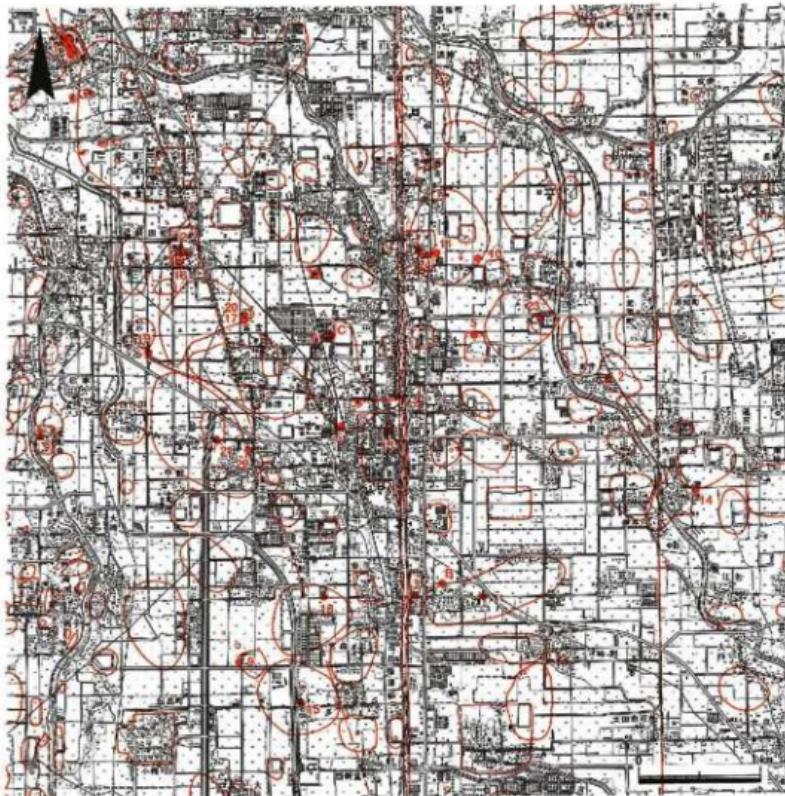
寺内町遺跡
第8次

III. 試掘調査・工事立会の概要

2003年度（平成15年度）に実施した試掘調査と工事立会は、第3表及び第4表に示す通りである。試掘調査は3件、工事立会は23件である。

試掘調査では、いずれも際だった成果は得られていない。羽子田遺跡の試掘調査2件は、隣接地の調査で方形周溝墓が確認されていたが、今回はそれに関連する遺構は検出されなかった。

工事立会では、そのほとんどがさしたる成果を得られていない中、黒田遺跡と宮古北遺跡での立会の成果が注目される。黒田遺跡の立会（R-200312）では、庄内期の土坑と近世の大溝を確認した。また、宮古北遺跡の立会（R-200320）では、古墳時代の溝や中世の土坑等を確認している。今後、周辺の調査によって遺構の分布状況を把握していく必要がある。



田原本町の遺跡と試掘調査・工事立会地点

第3表 2003年度 試掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	原因	追査番号 (田教文完)	追査日	調査面積	担当者	遺物量
A	羽子田遺跡 (S-200301)	田原本町八尾430-66	小野川義介	個人住宅の 建築	12	03.5.15	03.6.19	12m ²	清水 1 箱
B	千代遺跡 (S-200302)	田原本町千代1132-3	儀部則雄	個人住宅の 建築	18	03.5.30	03.7.16	6 m ²	清水 なし
C	羽子田遺跡 (S-200303)	田原本町八尾430-32	金子義明	個人住宅の 建築	100	04.2.12	04.2.23	9 m ²	夏谷 なし

(1) 羽子田遺跡 試掘調査 (S-200301・S-200303)

位置・環境 調査地は、遺跡の北西端に位置する。八尾池改修工事に伴う発掘調査で弥生時代の方形周溝墓を検出しているため、本届け出地においてもその拡がりの有無を確認するため試掘調査を行うこととなった。

検出遺構 (S-200301) 中世：素掘小溝5条
(S-200303) 近世：素掘小溝2条

出土遺物 (S-200301) 包含層から少量の土器が出士した。弥生時代頃の小片も含む。

まとめ 今回の試掘調査では、顕著な遺構はみられなかった。ただし、どちらも小面積の調査であるため、方形周溝墓群の拡がりについては慎重に検討する必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)

(2) 千代遺跡 試掘調査

位置・環境 千代遺跡は、標高53m前後の沖積地に立地する。遺跡は、西半の八条環濠集落と東半の遺物散布地で構成される複合遺跡である。

今回の調査地は、八条環濠集落の北側隣接地にあたる。調査地の南に接して環濠の痕跡とみられる水路があり、土塁跡の竹藪もみられる。

検出遺構 なし
出土遺物 なし

まとめ 今回の調査では、近世水田耕土層の直下が粗砂堆積となっており、遺構が拡がる状況ではないと判断した。粗砂層からの遺物の出土はなく、その堆積した時期を判断することはできない。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)

(3) 黒田遺跡 工事立会

所 在 地 田原本町大字黒田小字東戻348他

調査原因 下水道工事

調査期間 2003.11.19~12.5

調査面積 59.5m²

担当者 奥谷知日朗

遺 物 量 2箱

位置・環境 黒田大塚古墳の北側道路及び里道内において、下水道管の埋設が計画された。今回の工事立会は、東西約53.5mが対象となる。

検出遺構 古墳時代初頭：土坑1基

近世～現代：溝1条

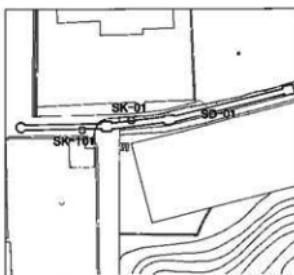
立会部分の西半中央で古墳時代初頭の土坑（SK-101）を検出した。土坑は、平面が円形で、円筒状を呈する。径約1.2m、深さ約1.6mを測り、黒色粘土および黒灰色粘土を堆積土とする。立会部分の東半で検出した近世～現代の大溝は、黒田大塚古墳第1・5次で検出した大溝と一連のものである。

出土遺物 SK-101の中層から、ほぼ完形の広口壺2点が出土した。1・2は中層、3は下層、4は上層からの出土である。

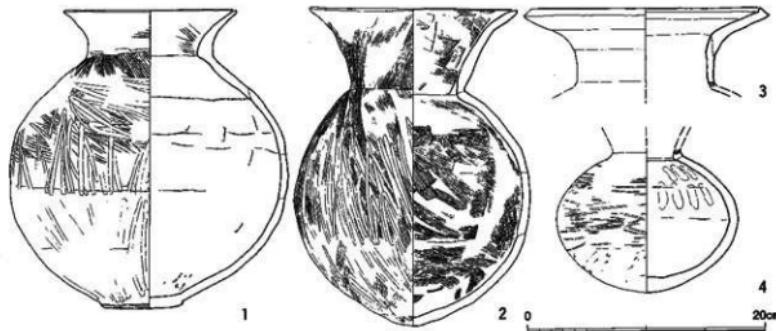
ま と め 今回の調査で検出した庄内期の土坑は、遺構の形態や遺物の出土状況から井戸と考えられる。本遺構は、黒田大塚古墳の築造以前に存在した、短期間営まれた集落と考えられる。



1. 立会地点の位置 (1 : 5,000)



2. 検出した遺構 (1 : 1,000)



3. SK-101出土土器

(4) 宮古北遺跡 みやこきた 工事立会

所在地 田原本町大字宮古小字宮古前528

調査原因 道路拡幅工事

調査期間 2004.1.28~1.30

調査面積 77m²

担当者 清水琢哉・豆谷和之・奥谷知日朗

遺物量 1箱

位置・環境 宮古北遺跡は、標高47m前後の沖積地に位置する。これまで13次の発掘調査を行い、古墳時代の集落跡、古代の建物群などを検出している。

今回の工事立会は、遺跡東端の宮古共同墓地南側で行われた東西方向の道路拡幅工事に伴うものである。当初遺構が希薄であると予想していたが、工事掘削により遺構を検出したため、一部掘り下げを行なうなど簡略な調査を行った。

検出遺構 弥生時代後期：土坑1基

古墳時代後期：溝1条

中世：土坑2基、大溝1条、素掘小溝群

調査区東半で検出した古墳時代後期の溝は、古墳周濠の可能性を想定していたが、出土遺物に埴輪がみられず、性格は特定し難い。

鎌倉時代の土坑SK-51は、直径約5mの土坑である。深さ約0.5m。室町時代の土坑SK-52は直径約1.3mの井戸である。

出土遺物 SK-51から12世紀頃の瓦器等が出土した。SK-52からは完形の土師器小皿や、瓦質擂鉢などが出土した。

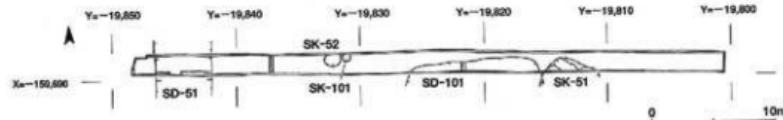
まとめ 今回の立会では、弥生時代・古墳時代・中世の遺構を検出した。本地北側の宮古共同墓地は、中世の屋敷地として削平されずに残った一段高い土地だった可能性がある。



1. 立会地点の位置 (1 : 5,000)



2. SD-101検出状況 (北東から)



3. 検出した遺構 (S = 1 : 400)

第4表 2003年度 工事立会一覧表

調査名	調査地	原団者	工事の目的	地図番号 (田舎文見)	進度日	調査日	内 容
1 千代遺跡 (R-200301)	田原本町千代999-1	平井民征	個人住宅の建築	73 (2002年度)	03.3.26	03.5.8	浄化槽掘削時に立会。縫隙は深さ1.2mで地山層。それ以上は中空壁の堆積層とみられる。
2 東井上遺跡 (R-200302)	田原本町東井上 150-3	松吉秀廣	個人住宅の建築	71 (2002年度)	03.3.14	03.5.15	予定外の地盤改良を行なうため、2mの試掘坑を設定。地表より0.5mまで古墳時代後期、0.7mまで不明遺構。古墳時代の漆1被出、古坟土器群出土。変更範囲の届け出を求める。
3 日光寺基定地 (R-200303)	田原本町千代322	平井 昭	個人住宅の建築	6	03.5.2	03.5.15	基礎は浅く、表土層に止まる。
4 東井上遺跡 (R-200304)	田原本町東井上 150-3	松吉秀廣	個人住宅の建築	16 (変更版)	03.5.22	03.5.30	深さ約0.2mまでの改良工事。遺物包含層までは達しない。
5 小阪桜木遺跡 (R-200305)	田原本町小阪 160-1の一部	松田義幸	個人住宅の建築	2	03.4.14	03.6.23	床土層下は地山層が認める。中空部塗小漬を検出するも、顕著な遺構・遺物なし。
6 羽子田遺跡 (R-200306)	田原本町236-12, 234-20, 234-22	中村正樹	個人住宅の建築	30	03.6.18	03.7.17	掘削に伴わない工事。地下構造の有無は不明。
7 唐古・糞遺跡 (R-200307)	田原本町糞349他 古墳道路	田原本町長	下水道工事	14	03.5.20	03.8.27 8.28 10.29 10.31	小人孔および個人住宅の排水管敷設工事の掘削時に立会。斜1カ所。各立会箇所において発生時代~近世の遺構を検出。既生落ち込み。中世:大漁1、小漁1、柱穴1。近世:大漁1。
8 金剛寺遺跡 (R-200308)	田原本町金剛寺 420, 421他	鈴木孝之	個人住宅の建築	10	03.5.15	03.9.29	基壇部西隅で立会。クラッシャー造成土内のため遺構の有無は不明。
9 矢部南遺跡 (R-200309)	田原本町矢部地内	矢部自治会長 吉川清文	水路の改修	70	03.10.21	03.10.16	水田面から-55cmの掘削、中空部含む内か。さらに-5~-10cm下げるところ、土壌部を含む砂質土堆積層が認める。古墳時代の西川内か。
10 唐古・糞遺跡 (R-200310)	田原本町糞 200-1の一部	中島ミサエ	農業用倉庫の増	54	03.9.19	03.11.3	既存農業倉庫の東側。掘削は、地表より0.4mで、客土内および旧地表面を削る程度。
11 唐古・糞遺跡 (R-200311)	田原本町糞255-2	森川重作	擁壁工事	75 (2002年度)	02.3.27	03.11.4	横92cm調査のデータをもとに、基礎設計。掘削は床土内に止まる。
12 黒田遺跡 (R-200312)	田原本町黒田348他	田原本町長	下水道工事	76	03.10.31	03.11.7 ~12.5	史跡地北側遺跡地内の立会。庄内式鏡の土壙1と近世~現代の大漁1を確認。
13 寺内町遺跡 (R-200313)	田原本町510-1他	さくら ホーム(株)	分譲住宅の建築	60	03.10.14	03.11.7	敷地中央を流れる南北水路の改修工事。地表より約0.4mで、近世後期?遺構層。それより下層は、旧水路の堆積層。
14 烏川南方遺跡 (R-200314)	田原本町農生206	山田庄城 行政事務組合	防火水槽の設置	24	03.6.12	03.11.10	道路の南西隅にあたる部分。床土以下は砂層堆積である。遺構・遺物なし。遺跡の範囲外か。
15 多遺跡 (R-200315)	田原本町多269-1 の一部	古田二郎	工事建設	23 (2000年度)	01.2.14	04.1.9	申請箇内の北東隅で立会。地表より約1.5mまで現代客土、約2mで旧水田米土。基礎掘削は客土内に止まる。
16 黒田大塚古墳 (R-200316)	田原本町黒田348 古墳道路	田原本町長	排水路の設置	36	03.7.2	04.1.13 1.14 2.26	黒田大塚古墳第6次調査の南側部分での立会。地表より約1mの掘削内にはほぼ現代耕作がある。

	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	准遺番号 (田畠文書)	進査日	調査日	内 容
17	宮古北遺跡 (R-200317)	田原本町宮古434、北斬水路	宮古自治会長 乾 幸徳	水路の改修	82	03.12.9	04.1.13	水路改修部分の東西約60mが対象。地表より約0.5mで中世包含層か。直下は地山層。頭骨・遺物なし。
18	宮森遺跡 (R-200318)	田原本町新木65 北斬水路	新木自治会長 竹村 滉	水路の改修	112	04.3.26	04.1.15	地表より約0.5mで灰色粘土層が抜かる。灰色粘土層は遺物を含まない。
19	宮古遺跡 (R-200319)	田原本町宮古2-1 南側道路		道路補強工事			04.1.27 1.28	宮古北遺跡第13次調査の東側。水田床土層直下に褐色粘土土の遺物包含層。土器片小片が出土。
20	宮古北遺跡 (R-200320)	田原本町宮古528	農家代表 田村 功	道路拡幅工事	80	03.12.9	04.1.28 ~ 1.30	宮古共同墓地南側、東西道路の掘削工事掘削時に立会。弥生~中世の遺構を検出。
21	十六面-墨王寺遺跡 (R-200321)	田原本町保津253 南側道路	田原本町長	下水道工事	96	04.2.9	04.2.19	立坑設置部分の4カ所での立会。床土層以下は地山が抜かる。遺構は認められず。
22	十六面-墨王寺遺跡 (R-200322)	田原本町保津233-7	桝本宗計	個人住宅の建築	98	04.2.9	04.2.24	工事履歴は零土及び旧水田耕土、床土層に止まる。床土層より、発生土器片1点が出土。
23	法貴寺青宮前遺跡 (R-200323)	田原本町法貴寺2033	前川吉治	個人住宅の建築	88	04.1.20	04.2.26	貯糞タンク設置部分での立会。対象となる2m×2.5mが中世の溝覆土内にある。土器小皿片が出土するが、遺構の詳細は不明。
24	唐古-鏡遺跡 (R-200324)	田原本町鏡283-29	梅木 雄	個人住宅の建築	34	03.6.25	04.3.15	掘削浅く、造成土内に止まる。

田原本町埋蔵文化財調査年報13

2003年度

平成16年3月30日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 明新印刷株式会社

